

タイトル	ヴェルネルの法則の記述に関して
著者	上野, 誠治
引用	北海学園大学人文論集, 20: 61-80
発行日	2001-11-30

# ヴェルネルの法則の記述に関して\*

上野 誠 治

## 0. はじめに

比較言語学の成果として、現在のヨーロッパ諸言語の多くはインド・ヨーロッパ祖語 (Proto-Indo-European, PIE) から派生していると推定される。このインド・ヨーロッパ祖語は紀元前 3000 年頃までは単一のグループを形成していたが、その後 12 の語派へ分化した。その一つにゲルマン語派があり、英語はその中の西ゲルマン語派に属する 1 言語である。12 の語派がインド・ヨーロッパ祖語から分化する際、ゲルマン語派の言語を他の語派の言語から区別する体系的な子音推移が起こったと考えられている。それをグリム童話で知られるグリム兄弟の兄ヤーコプ・グリム (Jacob Grimm) が 1822 年に整理・体系化し発表したものが、いわゆるグリムの法則 (Grimm's Law) である。しかし、グリムの法則通りにならない例外的な現象もいくつかありグリム自身も気付いていたようであるが、その問題は 1875 年、デンマークの言語学者カルル・ヴェルネル (Karl Verner) によって解決され、後にヴェルネルの法則と呼ばれるようになった<sup>1</sup>。

---

\* 本研究は平成 12 年度北海学園大学学術研究助成金 (一般研究) から一部援助を受けている。

1 Verner の発音は、鈴木・佐藤 (1981 : 211) によれば、[vǣ:nǣ, Dan. vér'nær] であるが、様々な読み方で我が国では紹介されているので注意が必要である。例えば、ヴェルネル、ベルネル、ヴェルナー、ヴェアナー、フェルネルなど。本稿では引用を除き、最も多く使用されていると思われるヴェルネルで表記を統一した。なお、このヴェルネルという表記は文部省・日本語学会・日本英語学会 (共編) (1997) でも採用されている。

そのヴェルネルの法則は、グリムの法則ほどではないにしても言語学・英語学・英語史の概説書などで言及されることが多いが、その記述および説明には相当のばらつきが見られ、ヴェルネルの法則とは具体的にどのような性質のものなのかがなかなか見えてこない。グリムの法則は、以下に示すような図式の体裁で導入されることが多いのに対して、

(1) Grimm's Law (Cf. Pyles and Algeo 1993)

PIE bh, dh, gh	→	Gmc b, d, g
PIE p, t, k	→	Gmc f, θ, x(h)
PIE b, d, g	→	Gmc p, t, k

ヴェルネルの法則は例えば「……このゲルマン語の音変化に関する法則は、ヴェルネルの法則 (Verner's Law) として知られている。」(藤井 1992 : 180) のような形で提示されることが多い。とは言っても、グリムの法則と同じような提示の仕方や、本文から切り離して紹介されることもある。以下に、その例を示す。

(2) Fromkin and Rodman (1998 : 466)

Verner's Law: When the preceding vowel was unstressed, **f, θ, x** underwent a further change to **b, d, g**.

(3) McMahon (1994 : 24)

Verner's Law

voiceless stops between vowels, when the preceding vowel is unaccented > voiced stops or fricatives

(4) 松本 他 (1983 : 157)

ヴェルネルの法則

$$\begin{array}{ccc} f & \beta & \\ \theta & \rightarrow \delta & \\ \chi & \gamma & \end{array} \quad / \quad \begin{array}{c} V \\ [-\text{accent}] \end{array} \quad \text{—}$$

これらはいずれもヴェルネルの法則を紹介するものだから、同じ内容を伝えているはずである。しかし、詳細はあとの節に譲るが、(2)は  $f$ ,  $\theta$ ,  $\chi$  (無声摩擦音 voiceless fricatives) が、さらに変化を受けて  $b$ ,  $d$ ,  $g$  (有声閉鎖音 voiced stops) になると言い、(3)は母音に挟まれた無声閉鎖音 (voiceless stops) が有声閉鎖音もしくは有声摩擦音 (voiced fricatives) に変化すると述べている。また、(4)は、 $f$ ,  $\theta$ ,  $\chi$  の音がそれぞれ  $\beta$ ,  $\delta$ ,  $\gamma$  (有声摩擦音 voiced fricatives) になるとしている。便宜的に単純な図式で示すとそれぞれ以下のようなになる<sup>2</sup>。

$$(2)' \quad f, \theta, \chi \rightarrow b, d, g$$

$$(3)' \quad p, t, k \rightarrow b, d, g \quad \text{or} \quad \beta, \delta, \gamma$$

$$(4)' \quad f, \theta, \chi \rightarrow \beta, \delta, \gamma$$

これでは、ヴェルネルの法則の核心が見えてこない。いったい、これらの記述の相違は何に由来するのであろうか。一方が正しくて、他方が誤った記述なのであろうか。本稿の目的は、これらの問題を検証し、その原因の所在を明らかにし、ヴェルネルの法則の最も適切な記述はどうあるべきかを考察することにある<sup>3</sup>。

2 国際音声字母 (The International Phonetic Alphabet, IPA) では、 $x$  と  $\chi$  は別の音であるが、ここでは単なる表記に使用した文字の違いであると考えられる。

3 本稿では、単音を表すとき、特に支障がない限り、音声表示する。ただし、引用箇所と言及するときは、その文献で採用されている表示を優先することがある。

## 1. ヴェルネルの法則

### 1.1. 無声摩擦音 → 有声閉鎖音

手始めに、松本 他(1983:156)におけるヴェルネルの法則の記述を見よう。そこでは次のように説明が始められている。

- (5) グリムの法則によれば印欧基語の無声閉鎖音 p, t, k はゲルマン語で無声摩擦音 f, θ, χ になったが、有声摩擦音 β, ð, γ になることがあった。(中略)そこで印欧基語において無声摩擦音の直前の母音に主なアクセントが置かれていない時には、ゲルマン語の**無声摩擦音は有声摩擦音になった**と考えられる。(太字は筆者)

ここで明らかなことは、グリムの法則で無声閉鎖音は無声摩擦音になるが、アクセントの位置によっては、その無声摩擦音が有声摩擦音になったと、推定している点である。この後半を定式化して提示したのが、先に示した(4)である。これを図示すると以下のようなになるであろう。

$$(6) \quad \underbrace{p, t, k}_{\text{グリムの法則}} \rightarrow \underbrace{f, \theta, \chi}_{\text{ヴェルネルの法則 (=4)}} \rightarrow \beta, \delta, \gamma$$

次に、(2)の Fromkin and Rodman (1998) が示したヴェルネルの法則と(4)の松本 他(1983) が示したものを比較すると、無声摩擦音が別の音に変化したことでは一致しているが、変化した先の音に関して異なっている。前者では、有声閉鎖音、後者では有声摩擦音になっている。そこで、松本

---

4 ヴェルネルの法則には、他に s > z の変化も含まれるが、この s はグリムの法則の適用の結果により生じたものではないので、以下では特に言及しない。

他 (1983 : 156) が提示する具体例を見てみよう。ここでは、関連するもののみ提示する。

(7) PIE p > Gmc ß

Skt *saptá*, Goth *sibun* (**b** は [ß]), OE *seofon* (=seven)<sup>5</sup>

(8) PIE t > Gmc ð

Skt *pitá*, Goth *fadar* (**d** は [ð]), OE *fæder* (WGmc で [ð] > [d])  
(=father) (太字は筆者)

これらの例において、ゲルマン語の例としてゴート語が言及されているが、特に注意が必要である。例えば、(7)においては、綴り字上はサンスクリット語 *saptá* の p がゴート語 *sibun* の b に対応しているのであるが、実は、この b は有声閉鎖音 [b] ではなく、有声摩擦音 [ß] なのである。同様に、(8)において言及されているゴート語 *fadar* の d も有声閉鎖音 [d] ではなく、有声摩擦音 [ð] なのである<sup>6</sup>。この点を見落としたために、不正確な記述になっていると思われるものとして、次に、町田 他 (1997 : 228) の記述を見てみよう<sup>7</sup>。

(9) ベルネルの法則によると、印欧祖語の /p, t, k/ は、一旦グリムの法則の記述するとおり /f, θ, h/ に変化した後、有声化する環境において /b, d, g/ に変化したが、アクセントのある母音の直後に位

---

5 seven の語源に関しては、3 節を参照のこと。

6 Bussman (1996 : 513), 亀井 他 (1998 : 181), 西光 (1997 : 102), Robinson (1997 : 10), 田中 (1988 : 714), 湯川 (1996 : 206) などにも同趣旨の言及が見られるので参照のこと。

7 他に Fennell (2001 : 37) にも、同様の記述が見られる。ここでも、グリムの法則によって t から生じた þ [θ] が d に変化したと述べられている。

置する場合には有声化しなかった。例えば、印欧祖語の \*pətēr<sup>8</sup> は、ゴート語では *fadar* であって、語頭の /p/ はグリムの法則の通り /f/ になっているが、語中の /t/ は、直前の母音にアクセントがなく、母音間という有声化の環境にあるので、/θ/ ではなく /d/ で現れている。

町田 他 (1997) の記述が正しいとすれば、例えば、\*pətēr の t はグリムの法則とヴェルネルの法則によって、 $t > \theta > d$  と変化したことになる。もし、ゴート語の *fadar* が /d/ 音を持つならば、その限りで説明は首尾一貫するが、前述したように、実際には *fadar* の d は有声摩擦音 [ð] なので、彼らの説明は頓挫することになる。

Fromkin and Rodman (1998) は具体例を何も提示していないが、おそらく、上で言及したゴート語 *fadar* や古英語 *fæder* などを綴り字上でインド・ヨーロッパ祖語と比較した可能性はあると思われる。その *fæder* も、語中に d を持つが、グリムの法則で [t] が無声摩擦音 [θ] に変化し、さらにヴェルネルの法則によって有声摩擦音 [ð] に変化した後、(8)で言及されているように西ゲルマン語派において独自に有声閉鎖音 [d] に変化したことが知られている<sup>9</sup>。したがって、この  $\delta > d$  の変化はヴェルネルの法則から切り離すべきである。Fromkin and Rodman (1998) および町田 他 (1997) はそれをしなかったために、無声摩擦音が有声閉鎖音に変化した、という記述に至ったと思われる。

McMahon (1994 : 23) も同様の誤りを犯していると疑われる箇所があ

8 アスタリスク (\*) は、その語が再建 (reconstruction) されたものであることを示す。非文法性 (ungrammaticalness) を示すものではない。以下同じ。

9 Bright (1992 : 70), Brook (1958 : 43), 藤井 (1992 : 180 脚注), Hogg (1992 : 109), McArthur (1992 : 1087), McMahon (1994 : 74), Mitchell and Robinson (1999 : 42), Pyles and Algeo (1993 : 90), 寺澤 (1997 : 485) を参照のこと。例えば、Pyles and Algeo (1993) では、以下のように説明してある。

. . . Old English *fæder* (in which the *d* is a West Germanic development of earlier [ð]).

る。以下の説明を検討してみよう。

- (10) ... although Grimm's Law predicts that **PIE voiceless stops** should become Germanic voiceless fricatives, they sometimes appear as Germanic **voiced stops or voiced fricatives**.

(太字は筆者)

ここでは、グリムの法則に従わない場合として、インド・ヨーロッパ祖語の無声閉鎖音が無声摩擦音とならず、有声閉鎖音もしくは有声摩擦音になることがあるとしている。その例として、以下のように説明を続けている。

- (11) PIE \*bhrātēr- 'brother' becomes Gothic *brōþar*, with medial \*t > /θ/, but PIE \*pātēr- 'father' becomes Gothic *fadar*, **with medial voiced /d/**. (太字は筆者)

ここで明らかのように、McMahon はゴート語 *fadar* の d を有声閉鎖音 /d/ であると見なしているために、町田 他 (1997) と同様の誤りを犯し、その結果、(3)で示したように、(無声閉鎖音が)有声閉鎖音に変化するとしたのであろう。なお、無声閉鎖音が子音推移の出発点になるという説については次節で検討する。

## 1.2. 無声閉鎖音 → 有声閉鎖音

次に、McMahon (1994) の記述(10)の中で、有声閉鎖音もしくは有声摩擦音に変化する元の音を無声閉鎖音であると想定している点に着目して検討しよう。これに類する記述をしているものに、Bambas (1980)、小野 (1980)、桜庭 (1982)、Trask (2000) などがある。(以下、太字は筆者)

- (12) Bambas (1980 : 43)

... *hund* should be *hunth* according to Grimm's Law, but, accord-

ing to Verner's stress-pattern theory, ***t* became *d*** when the IE stress did not precede the consonant in medial position.

(13) 小野 (1980 : 10)

印欧語の強勢が無声閉鎖音の後にあるとき(たとえば\**pátér*)は、その無声閉鎖音はゲルマン語においては有声閉鎖音となる——\**pátér* > \**fadér* > \**fáder*。これを一般に‘Verner’s law’という。

(14) 桜庭 (1982 : 23)

すなわち IE ***p, t, k*** は上記の場合には ***f, th (b), h*** とはならないで、それぞれ ***b, d, g*** になるというのである。これが「フェルネルの法則」(Verner’s Law) と呼ばれるものである。

(15) Trask (2000 : 362)

Specifically, PIE \*/*p t k*/, instead of developing as usual into Germanic /*f θ x*/, develop into voiced plosives /*b d g*/. For example, the inherited /*p t k*/ of Greek *hypér* ‘over’, *patér* ‘father’ and *hekyrá* ‘mother-in-law’ are matched by /*b d g*/ in Old High German *ubar*, Old English *fæder*, and Old High German *swigur*.

これらの記述を見ると、ヴェルネルの法則とは、「インド・ヨーロッパ祖語の無声閉鎖音 *p t k* が有声閉鎖音 *b d g* に変化すること」であるかのような印象を与える。これは、インド・ヨーロッパ祖語とゲルマン語を単純に比較しただけの結果であって、もしそのような印象を与えたとしたら、不正確な記述といわざるを得ない。特に、(13), (14)は、「これをヴェルネルの法則という」という趣旨の表現でしめくくっているのが、明らかに誤りである。また、Trask (2000) においても、インド・ヨーロッパ祖語と古高ドイツ語や古英語との比較が、単に綴り字上で行われているように思われる。例えば、古高ドイツ語 *ubar* の *b* は、実際には Robinson (1997 : 10) で指

摘されているように、*b* である。また、その音は Robinson の説明では、上歯というよりは上唇で調音される [v] となっているが、国際音声字母では [β] と表されるものである。

- (16) There was indeed a difference between the phonetic environments of those *p*'s that had gone to *b* (originally actually *β*, a [v] formed with the upper lip rather than the upper teeth) and those that had gone to *f*. (Robinson 1997 : 10)

また、Campbell(1991 : 516)は、ゴート語に関して次のように述べている。

- (17) /b, d, g/: pronunciation depends on position in word; cf. *barn* /barn/, 'child'; ***sibun* /sivun/**, 'seven', where /-v-/ is a bilabial [β]; *augō* /auyo:/, 'eye'; *dag* /dax/, 'day'; *drigkan* /drinjan/, 'to drink'. (太字は筆者)

*sibun* の *b* に関して、音韻表示では /-v-/ であるが、音声表示では [β] になるとしている。Robinson が(16)で言わんとするところは、おそらくはこのことであり、要するに、[v] と [β] は、/v/ の異音なのである。いずれにしても、古高ドイツ語 *ubar*、ゴート語 *sibun* の *b* は、どちらも有声摩擦音 [β] であることを確認しておきたい。

この他に、荒木・安井 (1992 : 1559) も、インド・ヨーロッパ祖語 \**pátér* と古英語 *fæder* を比較して、「……第2子音については、[PIE] t → [OE] d という変化となり、グリムの法則に合わないことになる。この例外を、アクセントの位置という観点から説明するのがベルネルの法則である。」と述べている。著者たちの意図とは異なるかもしれないが、説明の中に [PIE] t → [OE] d という図式を添えてしまったために、これがヴェルネルの法則である、という印象を読者に与えてしまうおそれがあるように思われる。

1.3. 無声閉鎖音 → 有声摩擦音

McMahon (1994) が示しているもう一つの可能性, すなわち「無声閉鎖音から有声摩擦音への変化」という趣旨と同様の記述をしていると思われるものに寺澤(1997:1256)がある。ここでは, seven の語源に関して, 次のように述べられている。

- (18) Gmc では IE の *-p-* は Verner's Law で有声摩擦唇音の *-b-* に変わり, *-t-* は序数詞 Gmc *\*sebunða-* (<IE *\*sepmtó-* (子音重複のため最初の *t* を消失)) の影響で消失した<sup>10</sup>。(太字は筆者)

ここでの議論に関係するのは, 上記(18)の前半部であるが, これを見た限り,  $p > b$  の変化こそがヴェルネルの法則であると読めてしまう。おそらくは, 「IE の *-p-* は Grimm's Law によって無声摩擦音 *-f-* になった後, Verner's Law で有声摩擦唇音の *-b-* に変わり, ……」と善意に解釈すべきであろう。また, 田中 他(1982:246), Miller(1996:10) もそれぞれ以下の(19), (20) に示すように, 同じような記述をしているが, これらは, 無声閉鎖音  $p$ ,  $t$ ,  $k$  から有声摩擦音  $\beta$ ,  $\delta$ ,  $\gamma$  への変化こそが, ヴェルネルの法則であるかのような記述になっているといわざるを得ない<sup>11</sup>。

10 (16), (17)に関して述べたように,  $\beta$  は [β] の音である。

11 長谷川・脇山(1998:7)では, ヴェルネルの法則に関して「つまり問題の音の直前の音節が印欧共通基語でアクセントを持っていれば無声音として残り, アクセントがなければ有声化するというものである(表1内の *pater* 参照)」と説明しているが, 参照を指示された箇所をみると, ラテン語と英語の比較で,

/p/ *pater* → *father*

となっている。したがって, この著者たちも  $t > \delta$  の変化を念頭に置いているように思われる。

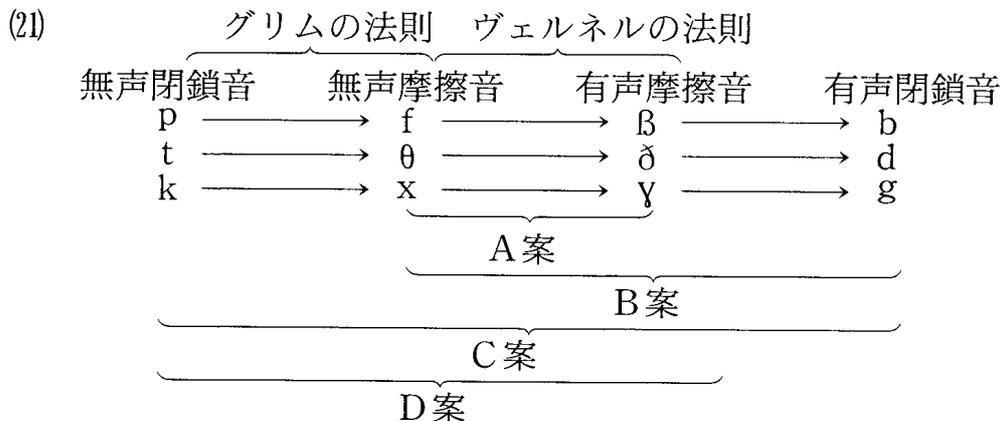
(19) これは不規則な変化であり、グリムは例外としたが、共通基語のアクセントの位置によって **p, t, k** は **β, ð, γ** として現れることがあるということを、ヴェルナーが証明した。これをヴェルナーの法則という。（太字は筆者）

(20) . . . Verner's Law, which said that **if the PIE voiceless stop is not initial, or is not immediately followed by a stressed vowel, then it becomes a voiced fricative** in the Germanic languages.

（太字は筆者）

#### 1.4. 検討結果と整理

以上、多くの文献を調査し、ヴェルネルの法則がどのように記述されているかを検討してきた。その結果、ヴェルネルの法則に関して、大きく4通りの解釈があることが判明した。一連の子音推移の中でどの部分がヴェルネルの法則と解釈されているかを示すと以下のようなになる。ただし、それぞれの著者の意図と食い違う部分もあると思われる。中には、誤りと言えないまでも、言葉足らずが原因で、結果として誤った、もしくは誤解を与えるような記述になってしまったものもあるであろう。ここにまとめたものは、前節までの検討をふまえて、筆者なりに整理したものである。



本稿で調査した文献が、いずれの解釈を取っているかをまとめると以下の

ようになる。

- (22) A案：Barber(2000：96)，Baugh and Cable(1994：20)，Bussmann(1996：513)，Fennell(2001：38)，藤井(1992：180)，松本 他(1983：157)，McArthur(1992：1087)，Mitchell and Robinson(1999：42)，中島(1979：89)，西光(1997：103)，O'Grady and Dobrobolsky(1996：317)，小野・中尾(1991：98)，Pyles and Algeo(1993：91)，宇賀治(2000：13)，吉田(1996：114)
- B案：小泉(1984：234)，Fromkin and Rodman(1998：466)，町田 他(1997：228)，
- C案：荒木・安井(1992：1559)，Bambas(1980：43)，小野(1980：10)，桜庭(1982：23)，Trask(2000：362)，安井(1996：850)
- D案：長谷川・脇山(1998：7)，Miller(1996：10)，田中 他(1982：246)，寺澤(1997：1256)

(21)において、無声閉鎖音から無声摩擦音への変化は、(1)に示したグリムの法則によるものと考えらるべきであるから、C案、D案の記述はそれを含んでいるという点で、ヴェルネルの法則の説明としては不正確であるように思われる。もっともD案に属する文献の中には、(18)に関して述べたように、善意の解釈で問題を回避できそうなものもある。また、B案、C案は、最終的に有声閉鎖音になるとしているが、有声摩擦音から有声閉鎖音への変化は、西ゲルマン語派内部での変化であり、東ゲルマン語派に属するゴート語などでは見られないものであるから、それはヴェルネルの法則から切り離して考えるべきであろう。

結局、ヴェルネルの法則とは、無声摩擦音から有声摩擦音への変化であると解釈するA案でなければならないと思われるが、実際、本稿の調査において、このA案の解釈をとる文献が数の上でも最も多い。

## 2. 表記上の問題

本節では、グリムの法則やヴェルネルの法則が導入されるときに使用される文字（フォント）の問題を検討する。まず、グリムの法則(1)を(23)として再掲する。

(23) Grimm's Law (Cf. Pyles and Algeo 1993)

PIE bh, dh, gh    →    Gmc b, d, g

PIE p, t, k    →    Gmc f, θ, x (h)

PIE b, d, g    →    Gmc p, t, k

ここではまず、グリムの法則を記述する際に、様々な記号（文字、フォント）が用いられていることを指摘したい。第1に音が音韻表示（例/p/）されたり、音声表示（例[p]）されたりすることがある。あるいは、(23)のように記号だけのこともある（例p）。第2に、有声有気閉鎖音（voiced aspirated stops）を表すのに、(23)のbh, dh, ghの他にb<sup>h</sup>, d<sup>h</sup>, g<sup>h</sup>のように表記しているものもある（Cipollone et al. (1998), Fennell (2001) 参照）。第3に、無声摩擦音のθがルーン文字でThornと呼ばれるþによって表記されることもある。また、おそらく読者の便宜を考えてのことと推察されるがp[θ]と表記され、þがどのように発音される音かを明示している場合もある（Fennell (2001), 田中 他 (1994), 宇賀治 (2000) 参照）。さらに、th (θ) という表記も見られる（小野 (1980)）。また、xの音については、Chiと呼ばれるギリシア文字のχで表示されることがある（Bussmann (1996), 松本 他 (1994) 参照）。さらに、(23)に示したx (h)の他に、x (or h) (Rodman and Fromkin (1998)), h[x] (田中 他 (1994))<sup>12</sup>, h単独の場合も多い。なお、このxの音は、語頭でhに変化する

12 これと類似したものとして中島 (1979) では、「h（発音はGchの音）」と表記されているが、趣旨は同じである。

ることが知られているが<sup>13</sup>、このように表記が多様であるのは、この情報を含めようとしたことが原因であると思われる。しかし、多くの概説書では、この情報に関する説明が省略されているために、読者（特に、初学者）に混乱を招く結果にもなっている。

次に、ヴェルネルの法則に関しても、グリムの法則の場合と同様に、多様な表記が見られる。例えば、有声摩擦音に関して整理すると以下のようになる。個々の記号のみならず、その組み合わせも多様になっている。しかし、この3つの音は、使用されているフォントの相違はあっても、それぞれ同じ音を表しているはずである。

(24) β, ð, γ : 藤井 (1992), 西光 (1997), 小野・中尾 (1991)

(25) β, ð, γ : Pyles and Algeo (1993)

(26) β, ð, γ : Bammesberger (1992), Bright (1982)

(27) b, d, g : 田中 (編) (1988), 中島 (1979)

(28) b, ð, γ : Brook (1958)

(29) b, ð, g : 宇賀治 (2000)

このなかで、国際音声字母のフォントは、(24)に見られる β, ð, γ である。Pullum and Ladusaw (1996) によると、それぞれ Beta, Eth, Gamma と呼ばれる。(25)では、Gamma (γ) の代わりにギリシア文字である Greek Gamma (γ) が使用されている。厳密には、Gamma と Greek Gamma は異なる音を表すが、有声摩擦音という点では同じである。(26)の ð もギリシア文字で、Delta と呼ばれ、一般的にはあまり使われないようであるが、国際音声字母の ð と同じ音である。(27)~(29)では、その他に、b, d, g が使用されており、それぞれ Crossed b, Crossed d, Crossed g と呼ばれる。

---

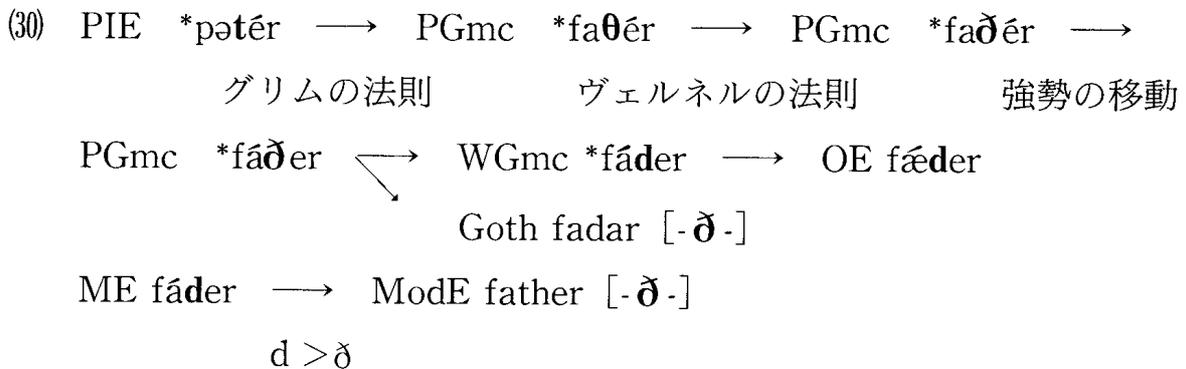
13 この情報に言及しているものに、藤井(1992)、長谷川・脇山(1998)、Pyles and Algeo (1993) などがある。

本来は、これらのフォントは同一の書体で表されるべきであるが、文献の場合、おそらく印刷の都合上もっとも便利なフォントが使用されたものと思われる。しかし、無用の混乱、誤解を避けるために、それぞれのフォントがどのような音を表すのか、説明を添えるべきであろうと思われる。

### 3. father, seven などの語源

この節では、以上の考察の結果として、英語 father と seven の語源を整理し、改めてヴェルネルの法則が、どの段階で適用されているのかを確認しておきたいと思う。なお、グリムの法則とヴェルネルの法則に関しては、(21)の表記を前提とする。

まず、father に関しては、インド・ヨーロッパ祖語から以下のような発達経路を辿ったと推定される。(寺澤 (1997), 宇賀治 (2000) 参照。)



インド・ヨーロッパ祖語 \*pətér は、グリムの法則に従って、ゲルマン祖語 (Proto-Germanic, PGmc) の語頭で p > f に、また語中で t > θ に変化した。次に [θ] は直前の音節に強勢 (stress) を持たないために有声化し [ð] となった。これがヴェルネルの法則による子音推移である。その後、西ゲルマン語派では、ð > d の音変化が起こり、\*fáðer となる。なお、ゴート語は東ゲルマン語派に属するため、この変化は受けず、[ð] の音が保持され、fadar [-ð-] となる。

その後、その\*fáðer は古英語、中英語を経るまで語中で [d] の音を保



に移動した後、古英語では *seofon* となり綴り字上は *f* で表されるが<sup>16</sup>、発音は有声摩擦音の [v] である。この間の  $\beta > v$  の変化は、ヴェルネルの法則によって生じた有声摩擦音の [β] が、8世紀中に /f/ の異音である [v] と併合したことによる（小野・中尾（1991：98）参照）。

#### 4. ま と め

本稿では、多くの文献で紹介されているヴェルネルの法則に関する記述を概観し、検討を加えた。それらを比較してみると、文献によってヴェルネルの法則の扱いが、実に様々であることがわかる。ヴェルネルの法則がどのようなものなのかを学ぶために、多くの文献に当たれば当たるほど、ますますわからなくなってしまう、という状況が存在するように思われる。それはまた、筆者1人の問題ではないと思われる。

検討・考察の結果、ヴェルネルの法則を部分的に誤解している著者が少なからず存在すること、また、誤った記述ではないにしても、読者に誤解を与えかねない記述が散見されること、などが明らかになった。その主な原因は、インド・ヨーロッパ祖語とゲルマン語という、いわば入力と出力との単純な比較に基づいて、ヴェルネルの法則を説明している点にあると思われる。例えば、インド・ヨーロッパ祖語 \**pətér* と古英語 *fæder* を比較すると、語頭で  $p > f$ 、語中で  $t > d$  の変化が見られる。前者は、グリムの法則で説明できるが、後者は説明できない。そこで、極端な場合、「強勢が *t* の直前の音節にない時、有声化し [d] となる。これがヴェルネルの法則である」といった記述になってしまうのである。確かに、「インド・ヨーロッパ祖語 \**pətér* が古英語で *fæder* となる」という説明は、必ずしも誤りではない。しかし、 $t > d$  という変化が一気に起こったのではなく、実際には、3節で整理したように、グリムの法則とヴェルネルの法則が相前後

---

16 古英語の初期の時代には、ゴート語と同じ *sibun* という形式も見られる。

して適用して、 $t > \theta > \delta > d$ と変化していると考えべきなのである。

さらに、同じ文脈において、古英語 *fæder* と並んで、ゴート語 *fadar* もよく比較されるが、この場合、*d*の文字が[ $\delta$ ]の音を表すというゴート語の特徴を見落とし、語中で見られる  $t > d$  の変化を支持するもう一つの証拠として扱われてしまうこともまま有るようである。馴染みのない言語を扱うときには、十二分な注意が必要である。

また、表記上の問題も、2節で見たように、混同・誤解の一因になっていると思われる。印刷上の理由でやむを得ないことかもしれないが、可能な限り標準的な書体のフォントで表記されることが望まれる。

### 参考文献

- 荒木一雄, 安井 稔 (編) (1992) 『現代英文法辞典』三省堂.
- Bambas, Rudolph C. (1980) *The Origin and History of The English Language*. University of Oklahoma Press. (鈴木榮一, 佐藤修二(編注) (1981) 『英語の歴史』金星堂.)
- Bammesberger, Alfred (1992) "The Place of English in Germanic and Indo-European." In Hogg(ed) (1992).
- Barber, Charles (2000) *The English Language: A Historical Introduction*. Canto Edition Cambridge University Press.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable (1994) *A History of The English Language*. Fourth Edition. Routledge.
- Bright, William (ed.) (1992) *International Encyclopedia of Linguistics*. Volume 2 Oxford University Press.
- Brook, G. L. (1958) *A History of the English Language*. André Deutch. (石橋幸太郎, 中島邦男 (編注) (1973) 『(英文) ブルック英語史』南雲堂.)
- Bussmann, Hadumod (1996) *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. (Translated and edited by Gregory Trauth and Kerstin Kazzazi) Routledge.
- Campbell, George L. (1991) *Compendium of the World's Languages*. Volume 1. Routledge.
- Cipollone, Nick, Steven Hartman Keiser and Shravan Vasishth (eds.) (1998)

- Language Files*. Seventh Edition. Ohio State University Press.
- Fennell, Barbara A. (2001) *A History of English: A Sociolinguistic Approach*. Blackwell Textbooks in Linguistics 17. Blackwell Publishers.
- Fromkin, Victoria and Robert Rodman (1998) *An Introduction to Language*. Sixth Edition. Harcourt Brace College Publishers.
- Hogg, Richard M. (1992) "Phonology and Morphology." In Hogg (ed.) (1992).
- Hogg, Richard M. (ed.) (1992) *The Cambridge History of the English Language. Volume I: The Beginnings to 1066*. Cambridge University Press.
- 藤井健夫 (編) (1992) 『英語の世界—英語学とその関連領域—』 昭和堂.
- 長谷川瑞穂, 脇山 怜 (編著) (1998) 『英語総合研究—英語学への招待—改訂版』 研究社出版.
- 亀井 孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) (1998) 『言語学大辞典セレクション ヨーロッパの言語』 三省堂.
- 小泉 保 (1984) 『教養のための言語学コース』 大修館書店.
- 町田 健 他 (編著) (1997) 『言語学大問題集 163』 大修館書店.
- 松本 有, 池上嘉彦, 今井邦彦 (編) (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店.
- McArthur, Tom (1992) *The Oxford Companion to the English Language*. Oxford University Press.
- McMahon, April M. S. (1994) *Understanding Language Change*. Cambridge University Press.
- Miller, George A. (1996) *The Science of Words*. Scientific American Library.
- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson (1999) *A Guide to Old English*. Fifth Edition. Blackwell.
- 文部省・日本言語学会・日本英語学会 (共編) (1997) 『学術用語集 言語学編』 日本学術振興会, 丸善.
- 中島文雄 (1979) 『英語発達史 改訂版』 岩波全書 143. 岩波書店.
- 西光義弘 (編) (1997) 『日英語対照による英語学概論 教師用 (独習用) マニュアル』 くろしお出版.
- O'Grady, William D. and Michael Dobrobsky (1996) *Contemporary Linguistic Analysis*. Third Edition. Copp Clark.
- 小野 捷 (1980) 『英語史概説』 成美堂.

- 小野 茂, 中尾俊夫 (1991) 『英語史 I』 英語学大系第8巻. 大修館書店.
- Pyles, Thomas and John Algeo (1993) *The Origins and Development of the English Language*. Fourth Edition. Harcourt Brace Javanovich College Publishers.
- Pullum, Geoffrey K. and William A. Ladusaw (1996) *Phonetic Symbol Guide*. Second Edition. The University Chicago Press.
- Robinson, Orrin W. (1997) *Old English and Its Closest Relatives: A Survey of the Earliest Germanic Languages*. Stanford University Press.
- 桜庭一郎 (1982) 『英語史概要』 篠崎書林.
- Stevick, Robert D. (1992) *A Firstbook of Old English*. Kenkyusha.
- 田中春美 (編) (1988) 『現代言語学辞典』 成美堂
- 田中春美 他 (1982) 『言語学演習』 大修館書店.
- 田中春美 他 (1994) 『入門ことばの科学』 大修館書店.
- 寺澤芳雄 (1997) 『英語語源辞典』 研究社.
- Trask, R. L. (2000) *The Dictionary of Historical and Comparative Linguistics*. Edinburgh University Press.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』 現代の英語学シリーズ8. 開拓社.
- 安井 泉 (1992) 『音声学』 現代の英語学シリーズ2. 開拓社.
- 安井 稔 (編) (1996) 『コンサイス英文法辞典』 三省堂.
- 湯川恭敏 (1996) 『言語学』 ひつじ書房.
- 吉田和彦 (1996) 『言葉を復元する』 三省堂.